

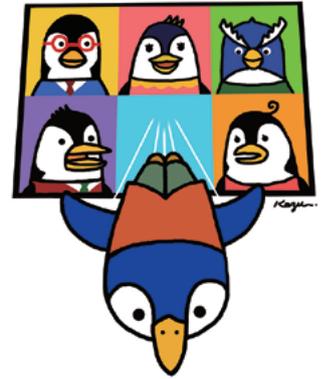


武内 紀子

TAKEUCHI Noriko

コングレ
社長

人が集まらないもどかしさ 新しい体験の価値が 未来をつくる



世界がコロナ禍に覆われて2度目の春。気候のよい春は秋と並んで、MICEのハイシーズンです。

当社は創業以来、国際会議や学会など「コンベンション」と呼ばれる大型会議の企画・運営・誘致を手掛けてきました。その経験を生かし、国際会議場や展示場の管理運営をはじめ、展示会・イベントの主催も行っています。これらのMICEビジネスから展開し、コンサートホールや美術館などの文化施設、展望台や水族館などの観光施設を合わせ、全国で約90の施設運営にも携わっています。

これらのビジネスは、いわば「人が集まること」で成り立ってきました。そのため、コロナ禍によって大きな影響を受け、そして変革を迫られています。

昨年4月の緊急事態宣言の少し前から、コンベンションのほとんどが中止や延期となり、宣言解除後には、その多くがオンラインでの実施に切り替わりました。また、夏からは人数制限をしての会場参加とオンラインとを併用するハイブリッド開催が行われています。

ウィズコロナでの新たなスタイルを模索するなか、オンラインで地域や国境を越えてつながることや、オンデマンドで時間に縛られず自由に参加できることなど、新しいメリットが生まれました。また、学会の会期中にeスポーツ大会を行い、楽しみながら親睦を深めるなど、新たな体験の価値も生み出されています。

一方で、会えないことのもどかしさや物足りなさ、スポンサーメリットの変化といった課題も明らかになってきました。バーチャル空間での演出技術は進化しても、展示会などではリアルの良さが再認識されています。製品の手触りやおいなどはもちろん、そこに込められた熱意や感情も、同じ場所にいるからこそわかる。そういう想いが募っています。

今、「マルチステークホルダー主義」や「三方よし」などを

キーワードとして、さまざまな人々がビジネスや企業とどうかかわり、どのようなメリットを得るのかを模索しています。それはつまり、ビジネスや企業の存在価値があらためて問われているということです。社会問題の解決に参画し、より良い答えを見つけることは、社会にとってだけでなく、企業価値の向上につながると皆が理解するようになってきました。

MICEも、主催者、事業者、参加者、協賛者、開催地といった従来のステークホルダーに加え、新たな技術やサービスを持つ企業など新規の参画を得て、前進しようとしています。

コロナ禍で変革を迫られるなか、当社は協業で「MICEイノベーション研究会」を立ち上げ、これまで漠然と思いついていた、デジタルトランスフォーメーション(DX)やデータ活用、開催時以外の期間でのマネタイズ、サステナビリティの追求など、他の業界や業種とのコラボレーションによって、少しずつ未来のカタチを見いだそうとしています。

「関西ビジョン2030」にうたわれている「ファーストペンギンの心意気」。どこよりも関西に似合うこの言葉に後押しされて、「(仮称)うめきた2期地区開発事業」や中之島の「未来医療国際拠点」で新たに計画中のMICE施設でも、「戦略実現ツール」としてのMICEの役割を果たすべく、さまざまなコラボレーションを企画し、新しい未来を描いていきたいと思っています。

2025年の大阪・関西万博は、見方によっては超大型のMICEでもあり、1970年の大阪万博を顧みても、まさに未来をつくるイノベーションの祭典となることでしょう。その胎動は、現在のウィズコロナの世の中で、すでに始まっています。この苦境を跳ね返そうとするさまざまなチャレンジに関西の力が発揮され、日本の明日につながることを、心から期待しています。(談)